

横山 茂雄編

『危ない食卓——十九世紀イギリス文学に見る食と毒』

東京：新人物往来社、2008、2000 円、300 頁。

多比羅眞理子

本書は2006年5月の日本英文学会第78回大会でのシンポジウム「十九世紀イギリス小説に潜む〈食〉の諸相」のパネリストを中心に書かれたものである。近年、日本のみならず欧米やアジア諸国でも食の安全を脅かす事件が頻発していることもあり、本書は英文学を専門とする人だけでなく、誰でも興味ひかれる構成になっている。とりわけ書名はインパクトが強く、思わず本書を手にしてしまうのではないかと感じた。筆者もその一人である。

第一部は、大久保護氏（イギリス文学・批評理論）、南直人氏（ドイツ近現代史）、そして横山茂雄氏（イギリス文学）が「近代イギリスの食をめぐる」というテーマでイギリスだけでなくドイツやヨーロッパの食の変化やその問題点に関する対談が掲載されている。そこでは食品偽装が、19世紀にすでにパンやワイン、ソーセージの類にも起きていたことが明らかにされている。本項では対談中の文学用語や文学者について尾註ではなく、同ページの下欄に脚注形式で説明されている。その量も字のポイントも大変読みやすい。内容も一般読者や、学生たちにも分かりやすく大変親切的な形態となっている。編集者が第一部を「分かりやすいことを心がけた」（3頁）と意図していた点は十分に達成され、優れた導入部となっている。

第二部は「イギリス文学にみる〈危ない食卓〉」と題して19世紀イギリス小説における食の問題を扱った5編の論文からなっている。最初に大久保護氏が「食の中の毒——ヴィクトリア朝時代の食品偽装の言説とセンセーション・ノベル」と題して食品偽装とセンセーション・ノベルとの関連性を取り上げた。イギリスではパン、紅茶、菓子そしてビール等の食品偽装が18世紀後半から広く行われ、産業革命後の都市への人口集中がその拡大に拍車をかけたこと、また、1860年には食品への規制が法制化され、この問題が決して新しい問題ではなかったこ

とが明らかにされる。続いて、食品偽装に対する批判キャンペーンレポートや、医学雑誌記事、パンチの記事が紹介される。大久保氏は食品偽装と同じレベルで毒薬に関する当時の社会概念、とりわけ食品偽装に関心を寄せていたディケンズが『ハウスホールド・ワード』誌に掲載したウィルキー・コリンズのセンセーション・ノベルを取り上げて、安全な食 — 英国と、危険な毒 — 外国という図式化、言説を紹介する。そしてセンセーション・ノベルというジャンルは社会に犯罪や欺瞞をもたらす異物であるとする世評・批判と共に、「食品偽装に対する啓蒙的役割を担っていた家庭向けの雑誌に毒薬を用いた小説のセンセーション・ノベルが掲載され、「毒」が入り込んでいた」（110頁）という皮肉な言説を伝えて論を終える。

岩田託子氏は「酒の危なさ — 十九世紀英国の危ない(酒)を「ジャネットの悔悟」に読む」として、ジョージ・エリオットのデビュー作『牧師館物語』（1858年）の中編三連作の最後の「ジャネットの悔悟」を取り上げた。ここで筆者は1830年代、アルコール依存症の主人公ジャネットが、レカバイト（禁酒主義を唱える人たち）の福音派の牧師トライアンのもとで禁酒をし、人生をやり直すまでの過程を述べながら、当時の飲酒問題と禁酒運動を論じている。とりわけ飲酒を現代のように健康問題としてとらえるのではなく、「過度の飲酒はモラルの低下や墮落を引き起こし、ひいては家族に悪影響を与え、家庭崩壊に導く」とモラルの問題として捕らえた当時の禁酒運動の流れを岩田氏は明らかにする。また、飲酒問題も酒の種類、宗教間でのとらえ方の相違の存在を明らかにする。とりわけ禁酒を誓う誓約書や禁酒を啓蒙するための読み物、幻灯種版などの図版資料は興味深い。

武井暁子氏は「食べてはいけない、食べない、食べられない — ジェイン・オースティンの拒食症患者を診断する」というタイトルで論を進める。現代病の一つであるように受け止められている拒食症が19世紀初頭には急激に増加したと述べている。本論では、拒食症の歴史や現代の症例として歌手カレン・カーペンターを挙げる。さらに、武井氏は、ジェイン・オースティンの『マンスフィールド・パーク』のファニー・プライスと『エマ』のジェイン・フェアファックスが拒食症であると分析する。当時、結婚が女性の最大な幸せであるとする社会概念では、よりよい結婚に到達するためには美しくあらねばならない。日常生活でも美しくあ

るためにクリノリンやコルセットで体を縛りつけ、その結果食べることができなくなる、また肥満は醜悪であるといった娘たちを縛りつけた様々な食をめぐる外的要因を挙げている。さらには意に沿わない結婚を強要されたり、意中の人との結婚が好転しないことも拒食症の発端であり、彼女たちが自己主張や、自己確立が容易にできないという心理的葛藤をも主な原因ではないかと分析する。一方でオースティンの時代に比べ、自由で自己主張が旺盛な現代の女性たちが拒食症で命を失うまでにいたったのは他者からの「ボディ・イメージという目に見えないコルセット」をまとい、縛られた結果ではないか、というヴィクトリア時代と現代の共通意識に触れた問いかけで論を終えている。これは、大変意味深い問いかけである。

小宮彩加氏は「ヴィクトリア朝のヴェジタリアニズムーロースト・ビーフの国の肉食主義者たちー」と題して、まず、現代のイギリスの人々にとって、ロースト・ビーフがいかに大切な食べ物であるのかを考察する。そして、19世紀に牛肉を含む肉食を「危険な食べ物」として拒絶するヴェジタリアンの登場を紹介する。その起源は古代から存在したが、ヴェジタリアンという言葉の起源はヴィクトリア朝にある。そして産業革命後の急激な工業化によって自然観にも変化が生まれ、動物愛護と人道上の理由から動物を食することへの反発からヴェジタリアニズムが浮上し、ロマン派の詩人シェリーがヴェジタリアンとしての道歩んだことは当然の帰結であると、イギリスの肉食主義の流れを明らかにしている。またシェリーの影響を受けたバーナード・ショウや、トルストイやマハトマ・ガンジーたちのその信条や社会的行動故にヴェジタリアニズムと密接な関係にあることを強調する。しかし、最後に、英国の誇りであるビールを拒絶することは、英国そのものを拒否する非国民的行為であり、ヴェジタリアンの食事こそ「危ない食卓」ではないかという視点は興味深い。

最後に南直人氏は「ヨーロッパ近代社会と食」ということで、ヨーロッパでの食の問題を論じている。食に関する研究は近年国際的にもやっと歴史学のジャンルとしてその地位を得てきたが、日本ではいまだに手薄であるという現状認識を提示され、その上で、ヨーロッパの食をめぐる大きなエポックの時代を19世紀とし、その時代の変化、問題点を論じている。まず、19世紀の大航海時代が食の相互交換を生んだという「コロンブスの交換」の影響、次に産業革命による

都市化の進行と都市の食糧事情、ドイツやイギリスの労働者の食生活の実態の問題など細部にわたって明らかにされている。また、19世紀後半になって、食品の不正行為禁止の法律が制定され食品の監視体制が確立、そのために必要な安全食品基準の設定システムの構築されるプロセスなどが社会的、歴史的に検証されている。前の4編の論が食をめぐる個々の問題を検証していたのに対して、南氏は、それらの背景を総体的に概説し、大きな枠組みで食の歴史研究、食をめぐる社会的状況、食料供給の問題点などが語られていて、最後をしっかりと包括する役割を十分果たしている。

第三部は第二部の資料となる論文の翻訳である。横山氏が、フリードリッヒ・アッカムの「食品偽装および食品に含有される毒についての論考—パン、ビール、ワイン、酒類、茶、コーヒー、クリーム、菓子、酢、芥子、胡椒、チーズ、オリーブ油、ピクルス、その他、家庭で用いられる様々な食品をめぐる不正な偽装を暴き、かつ、それらを見抜く方法を示す」(1820)とヘンリー・スティーヴンズ・ソールトの「菜食主義擁護論」(1882)を、岩田氏はジョゼフ・リヴァジーの「麦酒講演」(1874)を、武井氏はウィリアム・ウィズィ・ガルの「神経性食欲不振症(ヒステリー性消化不良、ヒステリー性食欲不振症)」(1874)を訳された。いずれも講演形式で本邦初訳である。訳の後には著者紹介を含めた「解題」が付記されている。論文の内容は、その副題からも明らかになるように、第二部の論旨の補講の意味合いがあるが、第三部だけ独立して読んでも19世紀の人々が直面する食の問題を窺い知るものとなっている。

小宮氏は「食は人のナショナル・アイデンティティを形成するほど重要である」(170頁)と述べるが、確かに食の安全は私たちにとって必要絶対条件である。その安全が脅かされるという問題が古代から、とりわけ工業化が進んだ19世紀に顕著になったことを本書によって知ることができた。本書では、食の問題が社会的、歴史学的、そして、文学との関連において、総体的に分析されており大変啓蒙的である。その意味でも本書は食文化史を伝える貴重な一冊であるといえよう。

(実践女子大学非常勤講師)